

## 六条大麦の止葉葉耳間長による幼穂長の推定

古川農業試験場

### 1 取り上げた理由

本県では六条大麦の減数分裂期追肥は細麦回避のため必須であるが、追肥時期が遅れると硬質麦の発生原因となるため、追肥時期の判定は本県の六条大麦品質の高位平準化を実現する上で重要である。本県では六条大麦の減数分裂期追肥時期の目安として幼穂長30mmを用いているが、実際に幼穂長を確認するのは困難である。

そこで止葉葉耳間長と幼穂長の関係について検討したところ、止葉葉耳間長による幼穂長の推定が可能となるので参考資料とする

### 2 参考資料

- 1) 幼穂長30mmにおける止葉葉耳間長の目安はシュンライで+3cm程度、ミノリムギで+1cm程度である。(表1、2)
- 2) 幼穂長20~30mm伸長期間は概ね3~4日間である。(表3)

表1 幼穂長と止葉葉耳間長

幼穂長		20mm		25mm		30mm
葉耳間長(mm)	シュンライ	-30 ~ -19		-12 ~ 0		+23 ~ +39
	ミノリムギ	-36 ~ -23	(1~2日)	-25 ~ -15	(1~2日)	+5 ~ +18
葉耳間長の形態的推移						

### 3 利活用の留意点

- 1) ほ場全体を対象とし、幼穂長30mm期を判断する場合、全茎数の40~50%程度が上記の止葉葉耳間長に達した時期とする。
- 2) 追肥時期が遅れると硬質麦が発生しやすくなるため、生産組織等の大規模生産の場合、上記の基準に達するやや前から追肥作業を始める。追肥作業を始める目安としては、幼穂長30mm期以前で最も早期に形態的判断が可能な時期である、全茎数の10~20%程度が止葉葉耳間長±0mm以上に達した時期が適当である。
- 3) 分けつ茎は 号および 号分けつを対象としている。ただし、 号分けつが明らかに弱小な場合は対象外とする。

(問い合わせ先：古川農業試験場水田利用部 電話0229-26-5106)

#### 4 背景となった主要な試験研究

##### 1) 研究課題名及び研究期間

主要農作物高位安定生産要因解析事業、麦類作況試験 平成13～16年

##### 2) 参考データ

- a. シュンライ、ミノリムギの幼穂長と止葉葉耳間長には高い正の相関関係が認められる。(図1～2)

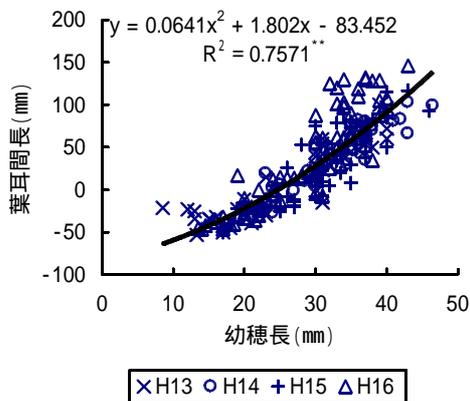


図1 幼穂長と止葉葉耳間長(シュンライ)

注1) 凡例のHは平成を、数字は年度を表す。

2) \*\*は危険率1%水準で有意であることを示す。

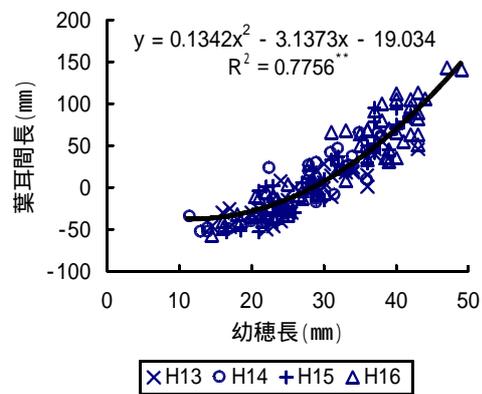


図2 幼穂長と止葉葉耳間長(ミノリムギ)

注1) 凡例のHは平成を、数字は年度を表す。

2) \*\*は危険率1%水準で有意であることを示す。

表2 幼穂長と止葉葉耳間長の目安

品種	幼穂長	幼穂長	葉耳間長
		データ範囲	(mm)
シュンライ	20mm期	18～22mm	-24.8 ± 5.35
	25mm期	23～27mm	-6.4 ± 5.98
	30mm期	28～32mm	+30.9 ± 8.31
ミノリムギ	20mm期	18～22mm	-29.5 ± 6.70
	25mm期	23～27mm	-20.4 ± 5.15
	30mm期	28～32mm	+11.5 ± 6.71

注) 葉耳間長は平均値 ± 平均値の95%信頼区間

表3 幼穂長20～30mm伸長期間

品種	試験年度	播種期 (月/日)	幼穂長		20～30mm伸長期間
			20mm(A) (月/日)	30mm(B) (月/日)	(B - A) (日間)
シュンライ	H15	10/10	4/8	4/12	4
		10/20	4/12	4/16	4
		10/30	4/16	4/19	3
	H16	10/10	-	-	-
		10/20	4/25	4/28	3
		10/30	4/26	4/30	4
ミノリムギ	H15	10/10	-	-	-
		10/20	4/15	4/19	4
		10/30	-	-	-
	H16	10/10	-	-	-
		10/20	4/25	4/29	4
		10/30	4/27	4/30	3

注) 試験年度のHは平成を表す。

##### 3) 発表論文等 なし